

【先生が読んで感激したことは必ず伝わる】

河合 本を読むときは、最初のページから最後のページまでを読むことが大事やと思うんです。一冊の本には、一人の人間の思いがこもっているでしょ。端から端まで読んで振り返り、うーんと考えるというのを今の人は味わっていないのではないのでしょうか。だから、僕は本を隅から隅まで読む運動をしたいんです。

今江 例えば、先生が長い物語一冊を、一日に十五分ずつ読んでいって、一学期間で終える。二学期も三学期もそんなふうが続けていくと、一年間で三冊になります。そんなふう読んでいたら、子ども

連載 対談

本を読もう 河合 隼雄 ⇄ 今江 祥智



今江 祥智（いまえよしとも）

絵本から長編小説までユーモアとペースに満ちた多彩な作品を世に送り出し、幅広い層から支持を得ている。光村図書 国語教科書編集委員を務め、中学校「国語1」には「麦わら帽子」が掲載されている。



河合 隼雄（かわいはやお）

ユング派心理学者として日本の社会や文化を鋭く分析し、数多くの作品を表す。一方で臨床教育学の立場から、子どもを取り巻く教育について鋭い提言も続けている。最近では、文化庁長官として文化を大切に社会を構築するため、やわらかくも強いリーダーシップを発揮している。

もらがそんなテンポで成長しても、しっかりと記憶に残るでしょうね。

河合 それはとてもよいと思いますね。長い時間をかけても、本を最後まで読むことをやるべきだと思えます。僕らの子どもは、読む本があまりありませんでしたから、教科書を端から端まで何度も読みました。

今江 僕も教科書をもらったその日のうちに、全部読んでしまいました。今のように教科書に掲載されている短い作品を何時間もかけて子どもに教えてると、子どもは読むことの楽しさを味わうことができないかもしれへんと思いますね。

河合 先生方はきつと教えるということに集中しすぎてい

【まず、おもしろいことが大切だ】

るのではないのでしょうか。段落はこうなっている、文法はこうである、という具合にです。ドナルド・キーンさんも、日本の学校ではたくさん難しいことを教えているが、むしろ文学はもっとおもしろいんだ、ということをお教えてほしいと言っています。

今江 読書は、そのストーリーを忘れてしまっても、心に残る部分があればそれでいいんです。そやのに、先生方は基本的に文法を教え、知識を習得させる方向に流れてしまっているように映ります。

河合 僕が小さいころ、先生が自分のお好きな本を読んでもくださるときがありました。それは、とても印象に残っています。ほんとうに感動した本を、「これはおもしろかった」と子どもたちに言うのと、「これはよい本ですからみなさん読みましょう」と一方的にすすめるのではまったく違います。先生方が実際に読んで感激したことは、子どもに必ず伝わりますよ。

今江 先生方には、本を読む時間がない、とはおっしゃっていただきたくないんです。僕も以前は中学校教師でしたから、先生方がお忙しいのはわかります。そやけど、なんとか時間を作って、本を読んでほしいんです。僕は、睡眠時間を削ってましたわ。そして、それを子どもたちに聞かせてあげてほしいですね。

河合 僕はフランスの作品『モンテ・クリスト伯』（岩波書店）が大好きでした。ちよつとそんなころ、戦争になり、フランスは日本の敵国になったんです。戦争になれば、敵はすべて悪いということになりがちですね。それが残念で、残念でね。子ども心にも、こんなことを書いているフランス人がすべて悪い、とは考えられなかったんです。本を読んだことで視野が広がって、軍人が言うことはどうも怪しいぞ、という意識が少しずつ芽生えたくてです。

今江 独特の反戦主義者ですね。僕は、戦争中には兄ちゃんの影響でクラシックマニアになり、特にドビュッシーが好きだったんです。そやのに、ある日、これは「敵性音楽」で聴いたらあかん、となった。なんでこんなに美しい音楽を聴いたらあかんのや、と思いましたよ。戦争が終わったら、おおっぴらに聴くことができたらうれしかったですね。

河合 あのような状況下でも、子どもなりの直感みたいなもので、感じ取っているものがきつとあるんですよ。兄貴でいえば、大学生だった兄貴が、中学校の入学祝い

「なんや、こんなおもしろい本を大人は読んでいばつていたのかと思つと、自分は損をしていたなと思ひました。」

今江 岩波文庫は固いというイメージがありますもんね。実際に読んでみると、そうでもないんですが。

河合 そこで、兄貴に手紙を書いたことを覚えてます。僕は、岩波文庫つてもつとためになることが書いてある本だと思つていたけれど、こんなむちゃくちゃおもしろい本を読んでいてもいいのか、という内容でした。すると、兄貴から返事が来て、まずおもしろいことが大切だ。そして、どんどん読んでほしい。『坊っちゃん』は作品全体を通じて、正義感が根底にあると思つと書いてありました。大学生はえらいなあ、と感心したことをよく覚えてます。

今江 あんな名作を中学校の教科書からなくしたら、ほんまにもつたないですね。永遠のベストセラーなんです。

河合 文化庁で、日本の文学をもつと海外で普及させようと国内の名作を英語に訳していく作業をしたとき、あるアメリカ人の学者が『坊っちゃん』を訳し直したい、こんなにはばらしい作品の訳が現在のものではよくないので残念だ、という申し出があつたんです。『坊っちゃん』の語り口を英語にしないといけない。へらんめえ口

調の訳をやりたい、とね。それを聞いていて、僕はとても感銘したんです。

【教師と子どもがいっしょに本を読むと読書はもつと膨らむ】

今江 子どもは、自分が読んでおもしろかつた本を絶対に人にすすめますね。僕は、娘が小さいころに白土三平の『サスケ』（小学館）を渡したんです。娘はその漫画を読んだ後、「おとうちゃん、これ読まへんか」と言つてくる。「おもしろいから、おまえに渡したんや」と答へたら、なあんやと言つて、今度は隣の家に行つてすめていました。

河合 きつと友達や兄弟で本をすすめ合つて読むんですよ。大人に「読みなさい」と言われると、腹が立つて読む気がしない（笑）。考えてみると、僕は児童文学の名作を自分の子どもの推薦で読んでいます。それこそ、アーサー・ランサムは、子どもの推薦でしたよ。それを読んで、僕が「おもしろいな」と感想を話したら、はいでました。

今江 子どもは、周囲にいる大人が本を読んでたら、また読むようになりますもんね。

【おもしろく本を読む場を作る】

河合 先生方が子どもに本を楽しんで読ませたいと思つたら、「その本の中でいちばん好きなところを読んでいらん」と呼びかけてみたらどうでしょうか。

今江 好きなところは、百人読んだら百人とも違います。作品を読めば読むほど、違いがあるでしょう。

河合 だから、僕は「この一行が好きだ」と推薦してもらつとよいと思います。

今江 一冊の本を細切りに読むことよりも、わつと全部読んだ中で、好きな一行を選んでもらいたい。

河合 そうですね。一冊の本を隅から隅まで読んでから選んでほしい。

今江 岩波文庫で言えば、星が一つの本しか読むことができない子もいれば、星が五つのものを五冊も読む子もいるから、お互いに違つた本を交換したらいいんですよ。

河合 中学生のとき、同じ教室に文学がわかる連中がいたんです。彼らは、長塚節の『土』を読んでいました。

今江 あの暗いやつですね。

河合 そう、僕は彼らのことを「くらーい」と言つていましたよ（笑）。

今江 僕は中学生のころ、図書館で『細雪』を回し読み



河合 そう、子どもは大人の姿勢を見ていますからね。大人がおもしろそうに読むと自分も読みたいと思つたでしょう。

今江 そのように大人と子ども、教師と子どもとが読み比べるなどして、いっしょに本を読んでいくと、読書はもつと膨らむと思います。

河合 おっしゃるとおりです。僕も子どもの感想を聞いて、びっくりするよつなときがあります。そんな具合に、生き生きとしてくれたらいいですね。先生が子どもに「読書感想文を書きなさい」と求めていくと、それを思い出して読んでしまい、まったくだめになるんです。

今江 僕も書評を書くとき、死ぬ思いですよ。書かなくてはいけないと思ひながら読むと、楽しさが一〇〇パーセント消えてしまつたんです（苦笑）。

していました。「こんなきれいな世界で、こんなきれいな女性がおつたらええな」とか思っていました。ある時先生が「お前は作品に出てくる人で、だれが好みや」と尋ねてはったんです。『細雪』などを教材的に子どもたちに読ませよつとするとしんどいんですから、これも立派な読み方ですよ。先生や保護者の方々が、子どもがおもしろく本を読む場を作ることができたら、かなり違うと思うんです。

【一冊の本を端から端まで読もう】

河合 まず、先生方には本を読んでいただきたい。残念ですが、本を読まない先生方が増えてきているように映るのです。読んだとしてもおもしろい部分をつまみ食いのに読むケースが多いのではないのでしょうか。

先生方には一冊の本をゆっくり端から端まで読むというをお願いしたいんです。子どもたちに読ませて先生が読んでいないというよりは、避けてほしい。

もう一つは、ドラマをもつ少し扱ってもよいのではなにかと思います。例えば、セリフのところを、君はここを読んでごらん、あなたはここを読もうよ、とやるだけでもだいぶ違います。セリフのところを、人を替えて読

むこともおすすめします。その時になるべく、心のこもった読み方をしてみようよ、と子どもたちに呼びかけていただきたい。朗読ももつとやってよいでしょう。

これから読書が教室で一つのテーマになると思うのですが、いちいち感想文を書かせるのではなくて、子どもたちには読んだ本の好きなところを好きなように読んでみなさい、自分がこの本を読んで、こんなにおもしろかったというところを、聞いている友達にわかるように、もう一度読んでみよう、と促してほしい。そして、「君はそんな読み方ができるんだ」と誉めてあげてほしい。ぜひ、先生方にはお願いしたいものです。

今江 あるテレビ局の仕事で、僕は四十二年ぶりにかつて自分が教えていた中学校に行つたのです。そこで図書館の係をしている時に買った本が、まささらで残つていたので。先生も子どもたちもいかに読んでいないか。それを知つた時、泣きそうでした。当時、なんとか本を読むことができる環境を作りたいという思いをこめて、いい本を集めたのですが、それがまささらのまんまが残つて。もちろん、全国には立派な先生がいらつちやるといふことは、百も承知の上で申し上げたいんです。先生方もとにかく、本を読んでご自分を豊かにしていただきたいのです。

先生方がお忙しいことはよく承知しています。しかし、ほんとうに好きなことやつたら、何でもやれると思うんです。例えば、ジャズが好きな人などは、一晩中聴いている日もあるはずなんです。まさに、好きこそ物の上手なれです。読書の時間は、自分で作っていくものだと思うんです。

以前は、本が好きな先生方を中心にした研究会や読書会があつたんですが、いつのまにか、一つまた一つと消えてしまいました。読書に熱心な先生が一人いらつちやれば、その先生を核にして広がりを持つていくと思つたんです。僕は、それを期待しているんです。

この対談は、光村図書のホームページ (<http://mitsumura-tosho.co.jp>) に「シリーズ・メッセージ」として掲載したものと「光村メールマガジン」にその続きを掲載したものとから抜粋しました。
ホームページ、「光村メールマガジン」につきましては、裏表紙をご覧ください。

